
frontier world

フラフラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f r o n t i e r w o r l d

【Nコード】

N O 1 6 2 Z

【作者名】

フラフラ

【あらすじ】

ちよつとした遊びのつもりでゲームのキャラをランダム作成した俺は、気付けばそのゲームの世界に迷い込んでいた。…ランダムの弊害で致命的にバランスの悪いキャラクターの身体で。しかし、バランスの悪さも武器になる！さあ、今日も最強目指して頑張ろう！「え、ちよつ、近距離戦は無理…こつちくん！前衛！助けてー！」主人公は段々強くなっていく予定ですが、最初はやたら弱いです。最初の話がひと段落するころにはそこそこ最強かと。

P r o l o g u e (前書き)

どうも、フラフラと申します。

更新速度は期待しないで下さい、ええ。

Prologue

―王国建暦893年。

神は、我らに大きな試練をお与えになった―

神聖大陸セイラント。

王国建暦元年以来、人々は統一された王国で変わらぬ日常を送っていた。

諸国の統一によって訪れた平和は、貴重な平穏と緩やかな停滞をもたらした。

王国建暦893年。

王国辺境の都市が壊滅したとの連絡が入る。

未知の魔獣による襲撃が原因であった。

王国が支配しているのは大陸の一部であり、東方には人跡未踏の大地が広がっている。

人口と比すれば国土の広さは十分で、未開の地を開拓する労力と危険を避けていたのだ。

調査の必要性が叫ばれた。

そして、そんな声に自らの道を見いだす者たちがいた。

「冒険者」と呼ばれる彼らは、仲間を見つけ、技術を磨き、危険な秘境に踏み入っていった。

ある者は未知の鉱石を持ち返って莫大な富を築き。

ある者は太古の遺跡から不可思議な技術の産物を発見してその勇名を轟かせた。

また、多くのある者たちは凶悪な魔獣の牙にかかり。

ある者たちはその姿を消した。

「冒険者」は、栄光と危険に満ちた仕事だった。

だが、人々は前人未踏の秘境を目指した。

己こそはいつかその名を轟かせる未来の英雄だと信じて。

―そしてまた、今日も一人の青年が辺境の地に足を踏み入れる―

新作RPG、「frontier world」の、その解説文は俺を惹きつけてやまなかった。

発売される1ヶ月前からそわそわし、前日の夜に至っては遠足前の小学生もかくやという落ち着きの無さだった。

…諸事情により友達が極端に少ない俺は、昔からゲームの世話になることが多い。

特に、RPGのようにこことは別の世界にのめり込めるゲームが好きだ。

今いるこの窮屈な世界から、自由な広い世界に飛び出す感覚が何よりの楽しみである。

そんな俺にとって、自由度の高さが売りの一つであった「frontier world」は理想の新世界だったのだ。

そして、現在12月23日。

当然予約開始日に予約したそのゲームディスクは今、俺の手の中にある。

発売日である今日、家の近くのゲーム店で製品を受け取り、期待に胸を膨らませながら帰って来た。

自宅に上がった俺は、コートも脱がずにそのままテレビの前に陣取ると手にあるパッケージを開く。

現れたディスクを一撫でし、ゲームハードのスリットに差し込んだ。

オープニングムービーはスキップ、現れた選択肢から当然New Gameを選び…

「うわっ!？」

表示された画面にはCharacter Makingの文字。

…だったが、ボタンを連打していた俺は何も決めないうちに設定終了してしまったらしい。

画面には、A l l R a n d o m ? と表示されていた。

すぐにキャンセルしようとしたのだが…

「さてよ、全てランダムってのも面白いかもな。」

そのままY e s を選んでみることにした。

カーソルをY e s に合わせて決定。

その瞬間―

俺の視界は強烈な光で真っ白になり…

俺の住む狭い部屋の中から、人の影が消えたのだった。

人影の無い室内。

点けっぱなしのテレビは、一つの警告文を表示し続けていた。

ーランダム作成は、コンピューターを使った完全なランダムでの作業なために、致命的なレベルでバランスの悪いキャラクターが作られる場合がありますー

ーでは、あなたの冒険者生活に神のお導きがあらんことをー

Chapter 1

空が、青い。

どこか遠くの空で鳴いているだろう鳥の鳴き声を聞きながら思った。

穏やかな風に辺りの草原の下草がサラサラと揺れている。

そこまでの情報をぼんやりと処理した俺の脳は、そこでようやく本格稼働を始めたらしい。

…ここ、どこだ？

何故か節々が痛む体を起こし、周囲を見回す。

前―だだっ広い草原。

右―だだっ広い草原。

左―だだっ広い草原。

後ろ―だだっ広い草原。

結論―俺はだだっ広い草原にいる。

…現状の整理を試みたが、何の発見もなかった。

どうなってる？

俺は確か自分の部屋でゲームを始めようとしていたはずだ。

面白半分にランダムでキャラクターを作ったのも覚えている。

それが、どんな経緯を辿ったら草原に寝っ転がって眠りこけてる状態になるんだ？

混乱状態の俺だったが、とりあえず立ち上がろうと尻を浮かし…

そこでようやく自分の状態に気づいた。

「服が…変わってる？」

思わず声が漏れる。

今日の俺の服装は、いつも通りのジーンズにシャツだったはずだ。

断じてこんな革製の手甲なんてつけていなかった。

ついでにいえば革手袋なんてしてなかったし、体にもこんな…胴鎧？みたいなものは着ていなかった。

同じような意匠の革ブーツも同様である。

なんだ？狐…というには洋風趣味なので妖精にでも化かされたか？

しかし…この鎧、初めて見たけど見たことあるような…？

うーん。

何だったかなあ？

…まあいいか。

俺はあっさりと悩むのを止めた。

ここがどこかも何が起ったのかも分からないのだ。

服なんか後で良からう。

よく考えてみると、こんな不可思議な状態なのに特に慌てる事もなくのんびりと考え込んでいるこの状況が既に異常だった。

だが、不思議と違和感はない。

何故ここにいるのかは知らないが、なるべくしてなったような気がするのだ。

…もちろん、只の現実逃避という可能性もあるが。

と、思考がそこまで迷走したところでようやく一つ有用な情報を思い出した。

この服装…さつきまでやっていた（正式には始めようとしていた）ゲームである「frontier world」の主人公の初期装備じゃないか？

このやたらと凝った装飾の入った手甲なんか見覚えがある気がする。

そしてこの胴鎧、形状から配色まで記憶と一致する。

間違いない、あのゲームの初期装備は全て革製で、こんな感じだったはずだ。

後は各種ステータスに割り振った初期選択ポイントによってキャラクターの得意、不得意、そしてなにより初期武器が決まったはずなのだが。

今いる場所を「frontier world」だと仮定して…少し解説を入れよう。

「frontier world」には最初から決まった職業だとか戦闘タイプは無い。

プレイヤーには最初に100ポイントのステータスポイントが与えられ、そのポイントを幾つかの選択肢に割り振る事でそのキャラクターの得意、不得意を決めるのだ。

例えば、前線で剣を振るう戦士を目指すのならば、物理攻撃力にボーナスを持つ筋力、「Str」という選択肢に多めのポイントを割り振る事になる。

この際重要なのは、ポイントを極端に割り振ったところで初期の数値は他よりは高い程度であるということだ。

ステータスポイントはあくまで「適性」を決める儀式であるから、最初から極端に高いステータスを持つ事は無い。

当然、「Str」にポイントを極振りすれば、そのキャラクターが成長するに連れて恐ろしい勢いで筋力、つまり物理攻撃力が上がっ

ていくだろうが、逆にその他のステータスは伸び悩むだろう。

「frontier world」において完全なキャラクターは存在しないのだ。解説終わり。

…気づいたら見知らぬ場所で、ついでにいつの間にかさつき始めようとしたゲームの服装となれば、ステータスとか武器とかもゲームの通りってオチなのか…？

……………。

おいおい勘弁してくれよ、ただでさえ初期の装備とステータスなんかで突然放り出されて不安どころじゃないってのに…

どーしよ、ランダム作成だよ。

しかし…本当にゲームと関係があるのか？

偶然、同じような服装ってだけでは…

…いや、そもそも何でこんな格好なのかも…というかほとんど全てが分からないのだ。

全く何もかも分からない状況よりはある程度の前情報があるゲームと同じ世界だと考えたほうが都合がいい。

違うつて証拠が見つかるまで暫定的に「frontier world」に迷い込んだと考えよう。

そうと決まればまずはステータスの確認か。

…あれ？ステータスってどうやって調べるんだ？

取りあえず。

「ステータス！」

「開けステータス！」

「ステータスウィンドウ！」

「オープンステータス！」

「ボタン！」

…色々試してみたものの、恥ずかしいだけに終わった。

自分の得意、不得意が分からないってゲームでは致命的じゃないか？

打たれ強い戦士タイプだったらいいが、魔術師タイプみたいな後衛型だったら目も当てられない。

障害物も何も無い草原で紙防御の魔術師一人は流石に勘弁して欲しい。

ゲームの世界ならば間違いなくモンスター、つまり敵がいるはずなのだから。

ポイントの割り振りが前衛タイプならば高い（だろう）身体能力で逃げるなりぶっ叩くなり出来るだろうが、後衛型ならばそれらの選

択肢は厳しいだろう。

ただっ広い草原じゃ、隠れる事も出来ないだろうし…

そもそも魔法なんて使える自信が無い。

使う才能…という能力があったとしても、使い方もわからん魔法
なんかで戦闘がこなせるとは思えない。

いや、悲観的思考は止めよう。

もしかしたらとんでもない身体能力が備わっているかもしれないし。

…まあ、なるようになるさ。

難しく考えるのを止めた俺は、東京じゃ見たことも無い真っ青な広い空に向かって大きく伸びをした。

と、そこで気づいた事があった。

「ん？」

なんだろう。

背中に違和感がある。

後ろに手を回してみると、硬い感触。

…あれ？俺さっきまで背中下にして寝てたよな。

という疑問はまあ、あとにする。

もしかして…剣か!?

身を守る事の出来る武器が手には入ればかなり心強い。

慌てて自分の体をよく見ると、太めの革紐が肩から右肩から左の腰辺りに抜けている。

革紐を回すように背後の物を目の前に持つてくると…

「ゆ、弓…。」

弓だった。

より詳しく描写すると、古ぼけた木製の弓。

…弦、切れかかってないか？

こんな武器で生き延びろってことか…？

いや、しかし仮にも主人公の武器だ。

それだけでは無いはず…だよな？

と、呆然としていた俺の耳に、不思議な音が届いた。

ーポーンー

続いて目の前に浮かび上がる半透明の文字列。

―サクトは《古ぼけた安物の木製弓》を入手した―

―全ての初期アイテムが揃った―

…え、なにそれ怖い。

俺は無意識に呟いたのだった。

chapter 2

手に入れた武器のあまりの貧弱さにしばしトリップしていた俺だったが、数分後に再起動した。

「ま、まあ、無いよりマシだし？むしろ遠距離から無双出来るかもしれないし？」

…自分で言つてて悲しくなってきた。

「frontier world」も元々ゲームであるからして、発売前にテストがあつた。

…まあ、普通はテストといえばネットゲームがするものだが、「frontier world」はかなりの製作費をかけた大作だったため、失敗が許されなかったのだらう。

当然、俺も応募したものの選ばれることはなく、幸運にもテストプレイヤーに選ばれた人々の多くがネット上に載せた様々な評価や事前情報を眺めていた。

俺の「frontier world」の少ない知識はここからきているのだ。

その情報の中に、一つの定説がある。

すなわち―

弓って最弱じゃね？（笑）

剣と魔法のこの世界での弓の位置付けは、悲しいくらい中途半端な武器だった。

弓であるから近接戦は不可能だし、射程距離は長距離魔法に負ける。

一撃の威力は攻撃魔法と比べものにならず（当然低い）、汎用性や対応力に至ってはもう笑うしかない。

弓に矢を飛ばす以外の使い道なんてないし。

はあ。

手に持つ弓を眺めてみるが、当然どんなに眺めても変化などあるはずもない。

「はあ。…せめてこの弓の性能がわかれば…いや、普通の弓うおあつ！」

最後の奇声は目の前に現れたやつぱり半透明の文字列に対するものだ。

「《古ぼけた安物の木製弓》」

その名の通りのボロい弓。弓として最低限の機能を持つ一品。まあ、最低限の機能しか持たないとも言える。まずは矢の調達から始めよう。

「矢はついてねーのかよ!!」

突っ込んだ。

全力だった。

何だろう、確かに気づいてみると弓しかない。

弓矢、じゃないただの弓だ。

解説文には悪意を感じるし。

あれ？目から汗が……

「はぁ……」

俺は、本日三回目のため息をこぼしながらひたすら草原を歩いていた。

進んでも進んでも景色は変わらないが、前には進んでいるはずだ。

多分。

爽やかな気分などつくに過ぎ去り、青い空も忌々しいだけのものになってきている。

雨空よりはマシなんだろうが。

ぼんやりと取り留めもない事を考えながら機械的に歩き続けている。

全く…何でこんな事になったんだか。

持ってた武器は役立たず…？

「なんだ？」

目の前が揺らいでいる。

見たところ、俺の前…どのくらい離れているのか分からないがとにかく前方の空間が揺らいでいた。

よくよく見ないと分からない小さなさざ波が、何もない空間の一点を中心に二次元的に走っているようだ。

揺らいでいる空間の先は今まで通り無限に続く草原が広がっていた。

なんとなく辺りを見回した俺は、ゆっくりと近づくと手に持った弓の先を近づけてみる。

「うわっ！？」

何の前触れもなく弓の先端少しが消える。

慌てて引き戻すと弓の先端も現れた。

ふーむ。

少々勇気を出して、今度は指を差し込む。

特に痛みも無く揺らぎを通り抜けた俺の指は、やはり消えたように見える。

これはつまり、別の空間に繋がっているという事なのだろうか？

意を決して、頭を突っ込んだ。

思わず目をつむってしまい、そのまま何歩か進む。

そして、ゆっくり目を開くと…

「…今度は森の中かよ。」

森だった。

誰がどう見ても完璧に。

そこら中に高い木が生え、足元は湿った落ち葉と土。

所々に毒々しい赤やら黄色のキノコが顔を出している。

…あれ？状況悪化してないか？

い、いや。とにかくあの無限の草原から脱出出来たんだ。

大きな進歩だろう。

そう、例え正面からピンク色の巨大熊が走って来ても。

ははは、そうさ。きっとあの熊は寂しがり屋なんだな。

久しぶりの人間に興奮しちゃったんだな。

…まあ、あの雰囲気を見るに「人間」と書いて「エサ」と読みそうだが。

うん、逃げよ。

「ぎゃあああ——!!」

「グオオオ——!!」

ヤバイ、超怖い。

どンドン距離詰めてくるっ！

「こっち来んなア——ッ！」

「グルオオオ——!!」

「お返事ありがとオ——!!」

マズい、息が続かない。

そろそろ限界だ。

やっと草原を出れたのになんて仕打ちだ。

「ッ…！ハッ…ハッ…ま、ずい…」

死んでたまるかよ！

俺は、最後の攻撃に出るために息を整え始めた。

え？前のはいつかって？

気にしない気にしない。

さて、さっきよりだいぶ距離を詰められたがこっちの準備も整った。

いくぞ！

せーの！

「たーすーけーてー！！」

うん、まあ助けを呼ぶくらいしか出来ないんだけどね。

「グルオオオオー！！」

「ええい！お前に言ったんじゃないやい！」

熊に向かって叫び返しながら再び速度を上げて走り出す俺。

既にドツドツという熊の足音がはっきりと聞こえる。

そして…

「ッ！」

ゴオッ！

風切り音にとっさに転がると、耳元をピンク色の暴力が抜けていった。

追いつかれたか。

逃走の無駄を悟った俺は、後ろを振り向きピンク熊と相対する。

俺の行動に対し、ぐるぐると喉を鳴らして唸りつつ身構える熊。

正直チビりそうだが、ゆっくりと身を屈める。

目は熊の顔を睨み付けたまま（虚勢）、手先で地面を探る。

ジリジリと近づいてくる熊から慎重に距離を保ちつつ、俺は背中から《古ぼけた安物の木製弓》を引き出した。

熊に向かって慎重に構え、拾った石を弦に当てる。

…キリキリキリ…

集中…集中…

転ばないよう細心の注意を払いながら後ろに下がり続ける。

同時に、熊の目に狙いを付けた。

不意に、熊がその場に止まる。

俺も足を止め、弓での狙いに全ての神経を傾ける。

飛びかかろうとしたのか、熊がほんの少しだけ身体を沈ませた。

その瞬間――

ビシュッ!!

俺は石を放った。

石は、思った以上に真つすぐに綺麗な軌道で空を切り裂き…

熊の眉間にぶち当たった。

ゴッ、という鈍い音が響き、熊は……

「グルルオオオーー!!」

怒った。

…残念、ここで目を潰せれば相手は野生動物だ。

逃げてくれるかもしれないかったんだけどな。

どこか達観したような諦めの心境。

俺は、熊がぶんぶんと頭を振った後、怒りの色もあらわにこっちに
向き直るのを見ていた。

熊は、四本の足をたわめ、俺に飛びかかろうとし……

俺の目の前に銀光が走った。

「ゲ……ルル……オ……」

呆然と立ち尽くす俺を最後に睨んだ熊は、弱々しい末期の声を上げて
前に突っ伏すように崩れ落ちた。

倒れた熊の背後には、いつの間にか鎧の塊が立っていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0162z/>

frontier world

2011年12月1日19時48分発行